

無くないづくしで始まったUTOですが人も設備も少しずつ充実してきました。二〇〇七年はステップアップの年です。

一昨年の十一月に長年の悲願だった山梨工場がスタートし、昨年一年間稼動しUTOにとっては何よりも嬉しい工場元年でした。

実際に製品が出来上がる物づくりの喜びや、思い通りに進まない難しさ。多くの成功や失敗が貴重な経験になり自信となりました。また、『カシミアとニットの話』の本を上梓出来て、一年の締めくくりが出来ました。

本社に営業の種橋が、山梨工場に有泉と釘崎が入社し、陣容も充実してきました。素晴らしい縁を持った仲間の参加で今年は今一段のステップアップを目指します。どうぞ宜しくご指導お願いします。

今年から、今までのカシミア受注会に加えて春夏物をスタートします。カシミア受注会は若々しい感覚のデザインを多数投入しました。

『春夏物スタート』

カシミアオンリーと言ったことは一年に一回、秋に収穫するりんご農家のような状況なんです。いろんな変更のあるお客様の注文を一枚一枚作るには相当の時間と手間がかかります。春夏物をやりたくてもカシミアの注文分を作るだけで一杯。と言うよりもシーズンに入って十月ころには注文が一杯で迷惑をかける状況で、生産限界が売上限界でした。

その上つらいのが資金繰りです。カシミアですから秋の立ち上がり早々の八月に納品させて頂いても、入金になるのがやと九月か十月。それまでずっとお金が出て行くだけです。経費はもちろん、高価なカシミアの糸、工賃など貧乏人にとっては莫大な借り入れです。途中でいくばくかの売上があれば資金繰りが格段に楽になるし経営も安定する。これは必然ですから、生産が安定したら出来るだけ早くスタートさせたいと願っていました。

山梨工場が稼動し生産の余裕が出来、やっと春夏企画をスタートすることが出来ます。

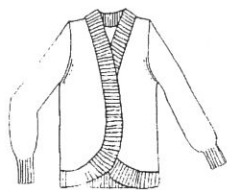
『まずは現物から』

春夏の展示会にはちよつと出遅れの感があるので、まずシルクコットンやコットンの現物からス



スービマコットン
7分袖透しカーデガン
No. 4012-2006 ¥25,200.-

抜群の肌触りのスービマコットン素材。可愛くなりちなドットも透かし柄でさりげない雰囲気演出。



ボタンなしカーデガン
No. 4012-2004 ¥26,250.-
シルクコットン

シルクコットンならではのさらっとした肌触り。上品なカットングでスタイルを選びません。真夏の冷房。肌寒い時に大活躍。外出のお供にお勧めです。



スービマコットン
リップ・フレアカーデガン
No. 4012-2002
¥25,200.-

今流行のフレアを活かしたカーデガン。リップとフレアの組み合わせで大人の可愛さを表現しました。華奢に見えます！



オオゴマダラ

スタートします。夏物の被り物はカッターがメインですね。セーター屋として羽織り物のカーディガンタイプを主体にしました。現物でつくりましたのでご用命ください。

『南青山界限』 UTOはこんな街から発信しています
收藏品をもたない美術館

国立新美術館

骨董通りに面した10階の我がUTOからは巨大な煙突のような六本木ヒルズ、東京タワー、先日完成した乃木坂の東京ミッドタウンの超高層ビルが見えなかなかに眺めのいいオフィスです。そのミッドタウンのビルと根津美術館の森の間に白い変わった建物が見えます。これが今年の1月21日に開館した国立新美術館です。

黒川紀章の設計で波のようにウエーブしたガラス張りの外壁にガラスの庇がついたようなとにかくインパクトのあるデザインです。UTOから自家用のチャリで約10分。地下鉄なら表参道から千代田線で一つ目の乃木坂のいちばん後ろの出口を出てエレベーターで美術館の入り口まで直行というとっても便利な処です。

美術館のロビーに入ると20メートルもある吹き抜けの空間が圧巻です。ガラス張りの外壁から光が入り、巨大な異次元の世界に入り込んだような感覚です。

この美術館は美術品などの所蔵品を持たない展示専用の美術館です。建物や施設自体が美術館と

いうことはオペラハウスやコンサートホールみたいなものでしょうか？

ミハーよろしく、開館してすぐ行ってみました。開館記念として『20世紀美術探検』という展覧会と、ここを設計した黒川紀章展が開かれています。展示を鑑賞するにも導線はスムーズで見やすいという印象でした。

日展や公募展も開催するようまで上野の都美術館まで行かなくなってきたので、私としてはとっても便利になり、楽しみが一つ増えました。

嬉しいのは展覧会を見なくても中に自由に出入りが出来て気軽に施設を利用できることです。地下1階から2階までの各フロアーにカフェ、3階には素敵なレストランがあります。

以前にも書いたことがありますが、美術鑑賞は結構疲れますよね。大きい展覧会は途中でコーヒーでも飲みながら一息入れることが出来る雰囲気のカフェやすわり心地のいい椅子は私にとっては好評のポイントです。館内には自由に休める椅子が適当に配置されています。なかでもロビーの右奥にとってもすわり心地のいい椅子があり、ここでは長居しそうです。

3階にあるレストランは広いロビー空間の断崖絶壁のテラスの上にあるような演出でなかなかスリルがあります。フランスの有名シェフ、ポールボキューズの初海外店というレストラン・ポールボキューズ・ミューゼのメニューには2皿2500円、3皿3500円とあり、かなりリーズナブルな値段の為に、2時を過ぎても長蛇の列で、なかなか食べる機会がありません。

こんなに素晴らしいつわが出来たので、私の希望として、出かけてゆく機会があまり無い日本中の個人美術館やローカル美術館・博物館を一同に集めたようなフェアを是非やってほしいです。なかなか帰れないわが故郷自慢の芸術家達の晴れ舞台がここで実現出来たら素晴らしいと思います。そんな企画こそ所蔵品をもたない国立の美術館しか出来ないことではないでしょうか。



防虫の話

ヒメマルが怪しいらしい

年に数軒のお店から虫食い被害の報告があります。セーターがやられたという話はウールのコートやスーツなどもやられている可能性は高いですね。そんなときに限ってとても気に入ったセーターや思い出深いコートだったりするんですね。被害者の殆どが『思いも寄らなかった』という無防備な話が多いんですが、是非『思いも寄らず』もって、衣類を食い荒らす虫のこや予防の方法をお客様に伝えて欲しいものです。

衣類に穴を開けるのは蛾の幼虫のイガとコイガ。カナブンの仲間のヒメカツオブシムシとヒメマルカツオブシムシ、中でも犯人の多くはヒメマルカツオブシムシらしいんです。

イガ(衣蛾)は蛾の仲間。夜の電灯に沢山の我が集まってくるけどあの中にはほとんどイガはいないそうです。イガは自然の中にはあまりいないのでカーペットや布などに卵や幼虫の状態で見つかるらしいんです。

エステー化学で防虫剤を研究開発されている農学博士の田中さん、いろいろな教えてもらったとき、自分で展翅したというイガの標本を見せてもらいましたが、成虫は羽を広げた状態で1センチぐらいでまるで蚊のような蛾です。『よくこんな小さな蛾を標本に出来ましたね!』と感心してしまいました。こんなのはたとえ飛んでいてもあまり気がつかないというのが私の印象です。

幼虫は成虫に比べて思ったより大きく1センチ弱で乳白色をしています。普段はミノを作り住んでいて食欲が旺盛で短期間に大きな食べ痕を作ります。

ヒメマルカツオブシムシ(姫丸錠節虫)の成虫はいわゆるカナブンの一種。といっても一般にいうコガネムシのような大きさではなく体長2〜3ミリの小さな甲虫です。名前が長いのでヒメマルと呼びますね。ヒメマルの幼虫は5ミリぐらい、全身を毛で覆ったゆる毛虫、幼虫で越冬します。衣類はもちろん名前のことと鯉節などの乾物から昆虫の標本までも食べる雑食。春、マーガレットなどの花に沢山のヒメマルの成虫が群がっているのを見かけることがあります。私も実際に何



日も見たことがあります。あの食害虫とは気がつきませんでした。近くの小金井公園や野川公園の花壇にいますし、家庭の庭の花にきているときもあります。成虫は花の花粉などを食べているんです。衣類や乾物を食べるのは幼虫の頃で、成虫は衣類に穴を空けたりはしません。

この様にヒメマルは日本の自然界に普通にいますので要注意です。成虫が発生する春の頃は花が咲いているので家を散策したときなど服にとまってしまうこともあるので家に入るときは気をつけてください。

また、外に干した洗濯物や布団に成虫がとまっていることがあるそうです。取り込むときには気をつけて、目でチェックしたり掃ったほうが良いと思います。春の薫風は気持ちのいいものですがヒメマルも盛んに飛び回っているの窓を開けても網戸はきちんと閉めたほうが良いと思います。

卵は20個から100個も産みつけられ1週間から10日間で幼虫に孵るそうです。この季節は、面倒ですがヒメマルに気をつけるしかなさそうです。

エステー化学の田中さんによると『地面から離して一段と高いところに置くというの効果があるようです』という話でした。これはヒメマルが長い距離を這っては登れないのではという話をしていたんですが、紡績の小金毛織の石井社長からもこれを裏証するよう『原毛の食害は地面に近い下にあるほど被害があるようです。2階に上げた原毛は全然被害が無いんですよ』という話を聞いたことがあります。

空中から飛んでくるヒメマルもいるけど地上を這って扉の隙間などから進入する奴も多いのかも知れませんが、そんな奴の為に床や床の隅などに毛糸くずがたまらないように掃除したり、毛製品は床などに直に置かずに必ず台の上に置くように心がけることが大事なような気がします。

食べこぼしや汁などの飛び散った残りがあった長い間放置すると食べこぼしたところをきれいに食べてしまうようなこともあるそうです。御用心御用心。

社中報・ニット屋のたわごと

初めての本の出版



昨年十月、このニット便り掲載している『カシミヤとニットの話』を一冊の本にすることが出来ました。この通信の連載が元ですが、元原稿は約5年間分の連載で199分。これだけだいたい半分ぐらいの量ですから、あと半分を書いてくださいと織研新聞社・編集の宮下さんは簡単に言ってくれました。原稿の締め切りはふた月後。5年で書いた分と同じ量を2ヶ月弱で書くのは僕にとってははおおごとです。

今までこのニット便りを書いたのは早朝と電車の中と休日の図書館でした。元来書くのが遅い上にいざ本になると間違いや勘違いがないようにと確認しながら書くのでなかなか筆が進みません。会社では電話や用事が次々に出るので全然集中できませんし、皆が忙しく仕事してる時にネットでの調べものはなんとなく気が引けます。こんなとき『著名な作家先生ならどこかのホテルや旅館で執筆だろうなあ、うらやましいなあ』なんてほやきがでます。以来、朝5時起きでパソコンに向かいます。早朝の1〜2時間は集中したらあつという間に出勤時間が来てしまします。山梨工場へ向かう列車の中は貴重な時間です。都心へ向かう通勤とは逆方向ですからがららのボックス席でPCを広げて原稿が書けました。

時間もないのに、初めての本だから書きたいことが沢山あります。あれもこれも、なんと云ってもこの本の出版をUTOのニットの売上につなげたいという下心がありますからつい宣伝っぽい文章になってしまっています。

そんな原稿を宮下さんに渡すと、『ここはちょっととっさりダメが出るんです。ここは抵抗しますが「著者は宇土さんですが本の発行はあくまでも織研新聞社ですから」と云うようなビビヨウなプレッシャーが掛かります。新聞社は公平がモットーなのでUTOやニットに偏っても都合の悪いんですね。なるほどと感心することばかり。本になることを一番実感したのがゲラ刷りが上がってワープロの字が印刷のスタイルになった時です。ふん、これが本か? 感傷に浸っている暇もなく一冊分の原稿を殆ど一日でチェック。自分で書いた文章なのでつい読み進んでしまいます。『下手な文章だなあ』と思いつつも先に進まねば時間がありません。

かくして出来上がった本。どんなに急いで上げる事情があったとしても本にならずと残ってしまいます。あすりや良かった。こう書けば良かった。と反省しきりですが、読者の方からの「読みやすくてニットのことがよくわかったよ」という反響に「安心」「取引をしたい」というお店からの連絡に嬉しさとしおです。次はもっといい本が書ける気がしますが、次があるかどうか...

ザ・ロイヤルハワイアン

旅行屋に成り立ての頃のハワイのイメージは、ワイキキの浜辺に建つピンクのホテルにダイアモンドヘッドでした。三十七年前、初めてハワイに行った時のホテルはカピオラ公園に隣接するクイーン・カピオラホテルでしたが、ひとりの親光を終えて、最初に飛んでいったのが憧れのピンクパレス、1927年創業のザ・ロイヤルハワイアンでした。恩師の塩田先生のホテル学の授業で、『一流のホテルは一流の宝庫、まず訪れて雰囲気に触れて、お茶の一杯でも飲んでサービス体験しなさい。余裕があったら実際に泊まってみなさい』を早速『お茶で』実行した懐かしいホテルです。その時の印象は、貧乏人にとってはリゾートと言うより宮殿という形容がぴったりで、にぎやかなカラカワ大通りからホテルの敷地に一步踏み込むと、静寂と格調の高い空気が流れ若造を黙らせる大人の世界がありました。

何年か後、実際に泊まってみると部屋の広さや機能としては、シェラトンやハイアトリージェンソン等、ハワイの近代的なホテルの方がずっと優れています。重厚だけど部屋や廊下は狭かったり、照明も全体的に暗いし、不便な点も多くあります。でも、近代的に完璧に管理された快適な空間もいかにちょっと不便な点に感じられます。それが南海の楽園時代のクラシックホテルの良さであり、醍醐味でもあります。



ザ・ロイヤルハワイアンと周りのホテルの違いは、歴史や建物の違いもさることながら、一番の違いは客層でしょう。ちょっと年寄り臭い気もするけど、ホテルの持つ雰囲気を感じるとは違うか声高でうるさい日本人やアメリカ人もここではおとなしい様子です。狭いワイキキで、ある程度の広さの庭を持っているのも、このロイヤルハワイアンと、隣のサーフライダーぐらいでしょう。そんなに広い庭ではないけどこのワイキキでは貴重な緑の空間は最高の贅沢でしょう。

この、ザ・ロイヤルハワイアンで私の絶対にお勧めなのが、ワイキキの浜辺に向かったレストランでの朝食です。プライベートビーチを前に、ダイアモンドヘッドを望む絶好のロケーションで、コナ・コーヒの香りが深いお皿の触れ合う音やアローハの挨拶が始まるウキウキした一日が始まるロイヤルハワイアンでの朝食。これぞハワイイイを堪能。朝の遅いリゾートの朝、七時ごろならそんなに混み合うこともなく、べらべらな値段ではありませぬので、泊まっても一度試す価値は十分に有りますよ。